

床の間コーナー「かしま再発見～能古見編～」ギャラリートーク

「滴水文庫が伝えた能古見の歴史と文化」

日時：平成 30 年 3 月 25 日(日)

場所：エイブル 3 階 研修室

講師：福源寺住職 田中浩樹さん

福源寺総代 馬場喜彦さん

鹿島市民図書館 高橋研一

【高橋】現在、床の間コーナーでは、能古見地区を紹介する展示として、福源寺の史料を展示しています。

そもそも、私達が史料を展示することが出来るのは、その史料を地域の中で守り抜いてきた人たちがいるからこそなのです。

そこで、今回は、実際に史料を守っておられる福源寺の住職田中浩樹和尚、そして地域社会の代表として総代会長馬場喜彦さんをお招きして、話を伺うことにしました。

福源寺を取り巻く環境はここ数年で大きく変化しました。佐賀大学の先生方による調査が行われ、膨大な書物が見つかりました。そして、2012年に『肥前鹿島福源寺蔵書目録』が出版されました。

これによって、鹿島の数あるお寺のひとつに過ぎなかった福源寺が鹿島の中でも文化的・歴史的な価値の高い特別のお寺となり、脚光を浴びつつあります。劇的に変わってきている福源寺の舵取りを行ってきたのが今日お招きした田中和尚と馬場さん、そしてお二方を支える総代・檀家さん達なのです。

【住職】福源寺の兼務住職の田中浩樹と申します。佐賀の大興寺で住職をしておりますが、たまたま福源寺の住職がいなくなるということで、兼務することになりました。

祐徳稲荷神社は鹿島で一番有名な神社仏閣です。祐徳院という言い方をしますが、鹿島の人でも、もともと祐徳院というお寺だったということを知らない人がいまだに多いです。そもそも大興寺を開かれた桂巖という方が福源寺から通って、直朝が建てることになった普明寺を毎日監督に行くのは大変だから、法泉庵を作られました。祐徳院はこうしてできた普明寺の末寺になります。そういうことを考えると、福源寺が黄檗における佐賀最古の寺なのです。福源寺がなければ普明寺もないし、普明寺がなければ祐徳稲荷神社さえございません、というふうにも言っています。



福源寺遠景

福源寺は直朝が直接開いたお寺で、梅嶺という小城出身の学僧を招きます。梅嶺と桂巖の2人が福源寺で切磋琢磨する日々を送っていたのだと思います。

梅嶺和尚と桂巖和尚は、ともに長崎崇福寺に、隠元和尚に会いに行っています。隠元和尚は黄檗宗を開かれた方です。中国の福建省にある黄檗山万福寺を経て、徳川4代将軍の家綱によって日本に招聘されます。長崎に迎えるために、興福寺、唐人屋敷、眼鏡橋、崇福寺などが整えられています。「ビートルズがやってきた」みたいなフィーバーが、隠元和尚が来た時にあったわけですね。これは文化まで変えてしまったといわれます。隠元和尚は宇治の五ヶ庄というところに、中国のお寺と同じように黄檗山万福寺を建てられた。江戸時代は臨済正宗黄檗派あるいは済家黄檗派という言い方もしますが、昔は宗派というはっきりした言い方はなかったそうなので、黄檗山という山号の名前を取って、黄檗宗と言っていたらしいです。

【高橋】ご住職がお話されたように、黄檗宗という言葉は明治時代になって成立した言葉で、江戸時代は臨済宗の一派でした。日本の臨済宗の場合、教科書的には鎌倉時代に栄西が開いたのが日本の臨済宗と言われてはいますが、栄西の一派がその後、臨済宗を指導してきたわけではありません。福源寺の前身である滴水庵を開いたとされる無学祖元はモンゴルによって宋が亡んだときに、日本に逃れてきた臨済僧です。日本に黄檗宗を伝えた隠元和尚は、満州族によって明が亡んだ際に逃れてきた臨済僧です。その都度、中国の臨済の高僧を招いてくる、それによって常に新陳代謝してきたのが日本の臨済宗なのです。その中でも最後に渡って来て、中国文化の形を最も色濃くもっていたので、他の臨済宗とは区別する形で、明治時代になって黄檗宗として独立したのです。

【総代】黄檗宗という言葉そのものも、親から聞いたのは、私が社会人になってからだだと思います。黄檗宗は隠元和尚が中国から渡ってこられて、日本に布教されたというお話ですけれども、私は両親を早く亡くしたものだから、寺にはよく参っていて、当時の住職の芳秋和尚からよく話を聞いていました。

非常に興味を持ったのは、高橋さんがおみえになり、福源寺には宝物がある、福源寺の大機和尚が所蔵されていた物が非常に良いものだという話を聞かされて、「あれー、そうでしたか」というふうなことが始まりです。福源寺に対する気持ちそのものは、今までの話の中から全国的にも良いお寺さんだと、つくづく考えているところです。

お寺というと、親兄弟が亡くなった時に弔うところ、親たちが行くもんだと感じていたのですが、和尚さんがそのうちの家系とか何とか良く知っておられるし、自分の家の過去を知るためには、やっぱりお寺に行かないとなかなか知る余地がないものだから、じいさんが亡くなって何回忌とか、そういう話を聞いていました。

私の小さい頃は、ちょうど福源寺にも同じ年くらいのお人がおられて、広い部屋があるものですから、福源寺の本堂で色々遊んで、本堂の周りの境内とかで遊んで回った記憶があります。

【高橋】現在、ご住職は兼務で、普段は佐賀におられます。そうした中で、福源寺の美観を保つということ、それから、人をお迎えするために、どういう取り組みをなされてきたかということをお話いただければと思います。

【住職】地域の行事や神事、三嶽神社の神事は今も盛大にやられていますけれども、福源寺でもお寺の行事の時に子ども達が来て、黄檗の施餓鬼は饅頭投げをしたりするものですから、饅頭をバーッと撒くんですね。その時にはもう賑やかにお祭り感覚で、寺の法事の中にも子ども達が溶け込んでいたという構図は、どこのお寺に行ってもそういう話は聞くのです。

福源寺の住職になって、能古見の山下の檀家さんたちと知り合って、深く膝突き合わせて話していくうちに、いろんなことがわかってきました。私は所蔵者であり、代表者でありながら、実際的な管理には手が届かないです。住職は未来永劫続けていくための橋渡しの役目にしかなってないと思っています。

私が普段は佐賀にいますので、福源寺では寺の掃除でさえ、月に2回、地域で当番を作っていました。寺にこんなに檀家の手が入っているということは、他の寺では考えられません。ですから、今の関係は本当にあるべき寺の姿ではなかろうかと僕は思っています。僕の世代では福源寺は絶対つぶれませんよ、というふうに言っております。そして、今の世代の方々がそう理解されている。やっぱりタイミングと、それに見合う方々との出会いが重なって、こういうふうな形になったのかなと思っています。

【総代】福源寺は田中和尚を迎えるまでの間、住職がいなかった時期があります。その経験から、やっぱり檀家が寺を守っていかなくてはいけないという意識があります。現在でも、寺の中から外まで当番制にして、だいたい5~6名位で月に2回、清掃活動をしています。そこで、皆さん責任持ってやっただいている、そこが一番良いところではないかと思っています。

【高橋】私が鹿島に来てから、一番長く関わっているのが福源寺です。なぜ福源寺にこだわるのか、それは現在の鹿島を形作っている文化の源流がこの福源寺にあると強く感じているからです。

鹿島の文化といっても、中世の時代の文化はほとんど伝わっていません。今につながっている文化は江戸時代に鹿島藩が出来てから、特に直朝が鹿島藩の3代藩主になった後のものです。直朝以降の鹿島鍋島家が培ってきた文化が黄檗文化と蔵書文化です。このふたつの文化を鹿島鍋島家に教えたのが福源寺なのです。鹿島の蔵書文化と黄檗文化の発祥の地である福源寺の価値は非常に高い、さらに、そこに膨大な文物が伝わっているのです。

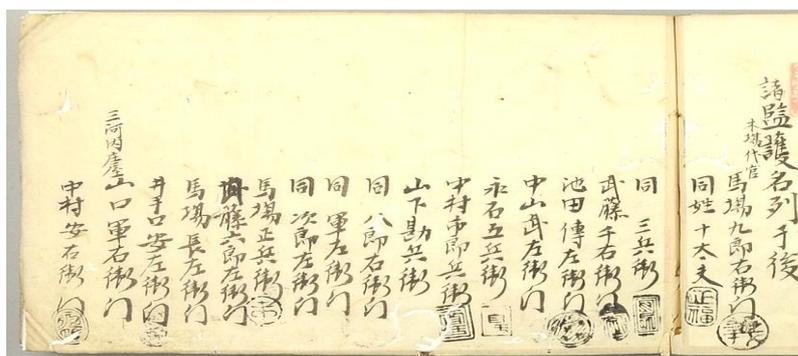
福源寺を開いたのは梅嶺道雪という黄檗僧です。梅嶺和尚は28才の時に鹿島にやってきて、藩主である直朝に、あなたのとこに立派な由緒をもつお寺が廃絶しているの、何とかしないとイケないのではないかと言うわけです。その言葉が直朝を動かして、福源寺が作られます。わずか28歳の若者が藩を動かしてお寺を作ったのです。高僧を招いてきて、お寺を建てるのが普通だった時代に、藩主にお寺を作らせたのです。梅嶺和尚は直朝を動かすに足るだけの知性と文化性を兼ね備えた人物だったのです。梅嶺和尚は寛文8年に福源寺に入られた後、寛文10年に出られているので、わずか2年程度の短い間しか福源寺に居られませんでした。



梅嶺道雪

わずか2年の間しか福源寺に居なかった梅嶺和尚は何をしたのでしょうか。お寺なのでご本尊が必要です。そして、ご本尊を守っていくための建物が必要です。それから、お寺を経営するための土地が必要です。梅嶺和尚は福源寺を新しく建てる時に、どういう順番でやっていったかということ、簡素なお堂を作って、そこにご本尊だけ納めて、後は書物を集めて回ったんです。檀家から寄付を集めて、書物を集めています。立派なお堂ができるのは3代くらい後になります。梅嶺和尚がこの地域の人たちに何を訴えようとしてお寺を作ったのかというときに、書物から学ぶことの重要性、これをお寺の根幹にすえたということがみえてきたのです。

梅嶺和尚は福源寺を出られる時、資産台帳ともいべき「福源禅寺常住物簿」を作成して、檀家にこれらの財産を守っていくことを誓わせています。普通、住職が交代する場合は、次の住職に托します。こういう財産があるので、これを守ってくださいと。それに対して、梅嶺和尚は後継の桂巖和尚ではなくて、地域の檀家たちに、これを



「福源禅寺常住物簿」 (滴水文庫蔵)

守って行ってくださいと。そして、檀家だった34名が、私達が守っていきますと誓っています。

梅嶺和尚が檀家に託した寺物の中で、とりわけ目立つのが212点にもものぼる膨大な書物です。佐賀県内で、蔵書を形成して、それを組織として残していくというのが始まったのは、この福源寺からです。例えば、藩主の場合、その人が集めていた書物は亡くなった時に、遺産分けで縁のあった人に分けられて、バラバラになっていきます。だから、直茂や勝茂が蒐集した書物は、塊として次の藩主に引き継がれていくのではなくて、バラバラになってしまい、後継藩主に託されるのはごく僅かです。そうやって、個人が持つ書物はバラバラになっていくのが当たり前だった時代に、梅嶺は書物を塊として、檀家がちゃんと塊として守ってくださいと託すわけです。

先程、ご住職が言われたように、黄檗宗は中国から来た最新の文化流行と捉えられてきました。大名や公家、一部の知識人の間だけで最新の文化として流行った。明治維新でこうした階層が地域から消滅すると、地域に定着していなかった黄檗宗は廃れていったといわれてきました。ところが、福源寺では、守り伝えてきた書物によって、地域の人たちがしっかりと黄檗宗を支えていたことがわかるのです。黄檗宗が地域に支えられ、根づいていたということが出来る、このことが福源寺の書物のとても大きな意義です。

そして、寺を開いた梅嶺和尚が書物を寺の基軸のひとつとしてきました。そして、明治維新の後、大機和尚が16代の住職になります。大機和尚は黄檗や漢詩文化に造詣が深く、書物を整理・収集しています。梅嶺和尚と大機和尚、このふたりを軸に福源寺の蔵書は形成され、伝えられてきたわけです。ただ、このふたりがいればいいという問題ではありません。当然、この間の住職たちも先代から引き継いだ書物をしっかり守る、そして、檀家が協力して、書物の継承に尽力したからこそ、これだけの膨大な書物を伝えることができたのです。

お寺に常駐する方が居られなくなった後、佐賀大学による調査が行われました。膨大な書物の目録を作成するため、書物をいったん佐賀大学に移動させています。そして、目録を作り終わると、今度は整

理が終わった膨大な書物を、どこで、どのようにして保管していくのか、という問題が出てきたわけです。いくつか選択肢がありました。福源寺に戻すという選択肢、それからそのまま佐大に預かってもらう、あるいは鹿島に戻した上で、鹿島の図書館に預ける。そもそも、その存在さえも知ることのなかった書物が、住職と総代の前に突然、しかも膨大に出てきたのです。いろんな選択肢がある中で、結論から言うと、本堂の一部を改修して、滴水文庫という書庫を作り、そこに全ての書物を納めることにします。

滴水文庫にいたる過程で、ご住職という立場、お寺と檀家をつなぐ役割を担う総代という立場で、膨大な書物をしっかりと書庫を作ってそこに保存するという形にまとめたのか、それぞれの立場からお話いただけないでしょうか。

【総代】先ほど高橋さんからお話がありましたように、お寺にとって大事なものが出てきて、これをどう保管していこうかと、いろいろ話をし続けてきました。井上先生や高橋さんの話を聞きながら、虫食いがひどくて、そのままにしていたら益々駄目になるだろうということで、新しく一部屋を書物の所蔵部屋にすることにしました。そして、錠前をかけて確実に保管しましょうということで、和尚と総代で話し合いをしながら進めてまいりました。



総代会長馬場喜彦さん

【住職】お寺で見つかった書物を、整理して目録を作るため、佐賀大学に持っていかれるときにも、いろんな意見はあったんです。なくなったりしないか、有名になってしまったものは帰ってきて誰も見なかったら物取りに襲われないか、あなたは住んでいないからどう責任を取るかとか。当然の心配事だと思います。でも鍵を持っている人を特定して、福源寺は開ける時だけ開けますという寺にする。そして専門の方を呼んで、そのお話を檀信徒に聞いていただくという形だったら、この寺を使ってできる文化的な広がりを見せる場面が作れるんじゃないかということで、寺の行事の際に、いろんな方に話をさせていただく機会を設け、勉強会の形で知っていただいています。この形になってきたのが、ここ7~8年くらいかなと思います。

【高橋】福源寺については、佐賀大学の先生を中心に目録が作られています。少しきつい表現にはなりますが、研究者の側は目録を作れば実績にもなるし、持ち主の方もこんなのがあるねとわかれば、その目録と本を引き取って終りというのが、だいたいのパターンだと思います。その後、ではどうやってこれを守っていくかという次の一步に踏み出さない、そもそもそういう発想がないというところが、今のほとんどの史料の所蔵者を取り巻く現況だと思います。

実際に目録を見ても、書名がズラーっと並んでいるだけで、この本がどういう本なのか、どういう中身なのか、これを自分たちが経済的な負担をしてまで守っていかないといけないものなのか、当然の本音だと思います。文化を守っていく、継承していくというところは、「大事ですよ」と共感、共有して

いただけると思います。でもその後、負担ということが必ずそこに出てきます。文化を守っていくための負担はどのようにあるべきかというのは、いまだに確かなものがないわけです。

そもそもそういう膨大な史料は、それにふさわしい経済力をもっていた家や寺社に存在していました。それが明治時代の地租改正や戦後の農地解放で大打撃を受けます。そうすると、江戸時代または戦前くらいまではなんとか、先祖代々の遺産を食い潰しながらも史料を保存していく手立てができていたのが、戦後全くできない状況になったのです。自分たちの経済的、文化的負担を越えた規模のものが今に託されているという状況になってきているわけです。

そうした中で、福源寺の場合は、井上先生を中心に目録を作っていたいただいて、「はい、そうですか」とはならず、その先に向かって、一步踏み出していただけたわけです。「何が書いてあるかようわからんけれども、これは自分達が責任を持って伝えていかなければならん」と。そして、まわりの皆さんにご負担をお願いすることにもなります。生々しい話ですけども、今後、文化を伝えていくためにはやはり重要などころ、その価値を共有しながらも、負担も共有する関係性、それはお寺だけではなく、神社や個人の家古文書も一緒です。鹿島市や博物館に預けてしまえば非常に簡単な話です。自分たちの目の前から消えてしまうけれど、負担などは全部行政がやってくれる、となってくると、史料自体は残るかもしれないけれど、地域とのつながりは完全にそこで途絶えてしまいます。伝えてきた地域の中でそれを守っていくというのが、一番重要で価値があることだと思います。

その一つのモデルケースを示しているのが福源寺の滴水文庫なのです。やはりそこで、一步踏み込んでいった要因や思い、そして、どのような形でお子さんやお孫さんに継承していったらいいのかということ、それぞれの立場からお話していただけないでしょうか。

【住職】 人間生活の中で、どうしても越えられない5つの壁というのが、老いること、病に陥ること、死ぬこと、壊れること、尽きること、これらは絶対的に人間一人の力ではかなわないとされる壁です。物は壊れますし、人の命は絶えると、その心も尽きます。

私自身は平成18年に、自分の佐賀の寺を全焼の火事で燃やしてしまっています。私が失った経験があったからこそ、私ももう50を過ぎてますし、その辺の未来観測的に、お約束ですからこれはこれだというような引継ぎはできない可能性もあるということを考えて、檀家さんにも興味を持ってもらおうというのが一番の流れだったかと思います。

そのためには、法要の後に、内容がわからなくても、おぼろげでも携わっていただく一連の場面を作っていくことというのは、僕の中でのライフワークになるのかなと思っています。

【総代】 蔵書そのものがとても大事なものであることは研究によって証明されました。それを後世に伝えていくためには、自分のところの仏様を大事にし、仏様にお参りするという習慣を子供たちに身につけさせることが大切だと思います。そしてこの福源寺に、江戸時代からの所蔵物があるということ伝えて知ってもらおうということをしていかないといけません。特に福源寺檀家そのものの戸数が少なくなって、いかにそれを守っていくかということが、これからの課題です。我々もあと数十年しないうちに消えていくだろうということになりますので、後世に伝えるのは、檀家さん一人ひとりに委ねるしかない私は思っています。

【住職】知ってしまったからこそ、ちゃんとディスカッションをして、熱く前を向いてくださる。それこそ福源寺は総代さんをはじめとしたすばらしい理解者、それと研鑽をされる方々がおったということですね。佐賀大学の方々が、この史料を喜んで汚れながら、それをまとめてくれたということです。そして腐食のいかないうような専門の箱を調べて、保存の状態とかもよくしようとしてきました。文庫も木造ですから、火事にあったら一発でやられます。けれどもその時はその時なんですよ。失った経験から言うと。でも人心が続く限りは、その教えとその過去にこうしてあったものというのは残るとい



福源寺住職田中浩樹さん

のが、今までの歴史の繰り返しではなかろうかと思えます。たまたま福源寺にはまだあります。そしてその魂を継ぐ人々が、今福源寺のまわりに住んでいる方々なんです。住職としてこれだけありがたいことはありません。そういった中で、そろそろ継承者というのを育てないといけない。そういうことになってきているのではなかろうかと思えます。

【高橋】これだけ滴水文庫の話をしてくると、どういうふうなものか、実際に見てみたいと思われると思います。地域の方々に滴水文庫を共有して見てもらえるような環境を整えて、支援の輪を広げていくのかといったところが重要な課題となってくるわけです。

【総代】滴水文庫を皆さんに広めるのは、やはりひとつの檀家総代の勤めとは思いますがけれども、一般に広めるというのは、今の状態ではなかなか難しいです。特別に見せてくださいという依頼があれば、文庫そのものを開放してもよいのではなかろうかと思えます。

【住職】学生さんや研究をされている方が、予約をしてお寺に入ってくださいということでしか現状としてはできていません。

ただ、勉強会に近いまじめな会というのは、一般の方には興味をそそるものではないかもしれませんが。日を決めて、その日はちょっとした“滴水祭り”ではないですけど、庭でバーベキューをしてから、お寺の座敷に宝物をバーッと広げて、イベント的なことの中に、ちょっとした勉強の機会を盛り込むというのはありかなと僕は思っていますけどね。

【高橋】目録を作って、その価値が広がると、それが盗難にあうのではないか、あるいは火事で焼けたらどうするんだという意見が必ず出てきます。何も動かないうちには、漠然とした不安だったり、課題だったりがあります。福源寺の場合は書庫としてまず作るという決断をしました。そうすると、次にはまたしっかりした課題が出てくる、ひとつの課題に取り組んだことが次の課題につながり、それを克服していく、そのサイクルに乗れるかどうかということが、非常に重要です。滴水文庫の価値を広めていくという課題がしっかりと俎上に上っていること自体がきわめて価値があることだと思います。

古文書や書物などの古い史料を守っていくという場合は、所蔵者、それを取り巻く地域社会、それから研究者、この三者がやはり共に考えて一緒に動いていくことが非常に重要だと思います。

福源寺では、史料の借用に伺うと、ご住職と総代さんが揃って、立ち会われます。その時には、これは何ね、何のために貸すとねということで、関心をもって話を聞いてくださいます。滴水文庫をどういう形で守っていくことが好ましいのかということ、自分たちの経済的な負担も含めて、身の丈にあった公開の仕方、保存の仕方とは何かということ、三者が率直に話し合っ、守っていく姿を作っているということ、このことが非常に大事な教訓だと思っているところです。

その中でも、一番大事なことは、それぞれが滴水文庫というものに触れてみるという心を失わなかったことです。住職と研究者はだいたい触れるものです。地域を代表する総代さんが滴水文庫に触れてみようということで手を伸ばして来てくれたお蔭で、潤滑な運営が可能になったわけです。それぞれの立場から自分たちがそれに触れてみるということ、これが一番重要なスタートラインではないでしょうか。それが滴水文庫というもののスタートと今後伝えていく中での、地域社会への一番重要なメッセージではないかと思っているところです。

ただ、福源寺が特殊な事例となってしまうのは困ります。住職が兼住であり、総代さんたちが触れる意欲を持ち続けておられたからこそ、滴水文庫が創設されたわけですが、それで終わってしまうと、福源寺だけが特殊であったとなってしまいます。今日、福源寺と滴水文庫を知っていただいたことをきっかけに、みなさんのまわりにある地域の歴史や文化、そして史料との係わり方について少し見つめなおしてみる、そしてそこに触れてみる努力を始めるきっかけにいただければ幸いです。